

## PAMIC ご入会のご案内

実地医家にとって単純X線写真は非常に重要な診療の「Evidence(証拠)」となるものです。我が国の医療の特徴は、一次医療から三次医療まで、その境目がはっきりしておらず、三次医療に求められると同じことが一次医療にも求められかねないところです。司法制度の改正による弁護士増加も伴って、医療過誤に対して非常に敏感な世の中になり、「診療情報提供」という形で、実地医科に対してもより客観的な医療データの提供が求められるようになりつつあります。実地医家にとっては、その「Evidence(証拠)」の大きな力となるのが、単純X線写真と考えます。我が国では単純X線写真は臨床医が読影するものとなっていますが、CTやMRIがなかった時代には、単純X線写真の診断能そのものがそれほど問題にはなりませんでしたが、しかしながら今やCTやMRIでたちどころに正解か否かがわかってしまう時代になりました。放射線科専門医の間でも単純X線写真は怖くて読めないという声が聞かれる時代になったのです。

このような時代だからこそ、第一線の医療で重要な役割を持つ単純X線写真の読影を毎日CTやMRIを読影し、いわば毎日その正解に接している放射線科専門医がその読影責任を分担すべき時なのではないかと考えました。

単純X線写真の診断能はまず読影者がどれだけ沢山の異常所見を知っているかということです。正常の写真をいくら沢山見ても診断能はあがりません。そして丁寧に過去の写真と比較することです。この二つのことを日常診療に忙しい実地医科の先生がなさること自体がはじめから無理なことです。諸外国ではX線写真の読影は放射線科医とのダブルチェックが原則です。我が国で実施されている胸部CTの実に75%以上が胸部X線単純写真の誤読影によるものであるとさえいわれており、私自身もほとんど毎日遭遇しています。誰かがそれを医療過誤として攻撃を始める前に心ある先生方と先手を打ちたいと考え、「実地医家画像診断協力推進協会:Practitioner's Association for Medical Imaging Collaboration:PAMIC」と言う会を立ち上げることにいたしました。いろいろなレベルでのご参加を可能としたいと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

実地医家画像診断協力推進協会

Practitioner's Association for Medical Imaging Collaboration:PAMIC

事務局長 獨協医科大学名誉教授、埴田放射線科クリニック院長

藤岡 陸久